

大 豆

1 予報（9月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予 報 の 根 拠
紫斑病	－	やや多	(1) 前年の発生量は、平年よりやや多かった。(＋) (2) 9月の気温及び降水量ともにほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
マメシンクイガ	－	並	(1) 前年の発生量は、平年並だった。(±)
吸実性カメムシ類	－	並	(1) 9月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【紫斑病】

- (1) 子実肥大期（開花後40日頃）までに薬剤防除を実施する。なお、マメシンクイガと同時に防除する場合は、マメシンクイガの防除時期に合わせる。防除適期が重ならない場合は、それぞれの適期に防除を行う。
- (2) 薬剤が莢によく付着するように散布する。
- (3) 適期収穫に努め、すみやかに乾燥する。

【マメシンクイガ】

- (1) 有機リン剤による防除適期は、産卵盛期（県北は8月第6半旬、県央・県南は9月第1半旬）なので、直ちに薬剤防除を実施する。
- (2) 薬剤が莢によく付着するように散布する。

【吸実性カメムシ類】

- (1) 発生が見られる圃場では、有機リン剤や合成ピレスロイド剤等による防除を実施する。
- (2) マメシンクイガと同時に防除を行う場合には、有機リン剤を選択する。

【アブラムシ類】

- (1) ジャガイモヒゲナガアブラムシは通常の密度は低いですが、異常増殖することがあるので注意する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止対策を徹底する。
- (2) QoI殺菌剤及びDMI殺菌剤は、耐性菌の発生リスクが高いため、連用を避け、2～3年に1回の使用にとどめること。
- (3) 無人マルチローター（ドローン）による大豆の紫斑病やマメシンクイガ防除では、莖葉内部への薬剤の付着が劣るため、十分な効果が期待できない。